



D.Core概要及び
基本セット Ver 1.25
管理者取り扱い説明書
(2008 / 3 / 1 版)

Written by H.Yamamoto 2008

■注意

- (1) 本書及びソフトウェアを運用した結果の影響については、責任を負いかねます。あらかじめご了承ください。
- (2) 本書及びソフトウェアの著作権は作者にあります。許諾を得ずに複製及び利用することは禁じます。
- (3) 商標

Microsoft,MS,Windowsは米国Microsoft社の米国およびその他の国における登録商標です。その他ソフト名は一般に各メーカーの商標または登録商標です。

D.Core Copyright By Harenori.Yamamoto 2008

D.Core 取り扱い説明書 2008

e-mail address : sunlover@sea.plala.or.jp (Harenori.Yamamoto)

< 目 次 >

『D.Coreシステムの概要』

■ D.Coreの概要～インストール	
D.Coreの仕組みと概要	1
運用環境の準備	2
インストール方法	3
起動方法	3
■ 保守・管理	
バックアップ	4
バージョンアップ	4
更に安定させる方法	7
■ 管理者作業のまとめ	11

『基本セット』

■ 基本セットの内容	15
■ 学校情報	
学校情報設定	16
■ 生徒データ	
新規追加（Excelから一括追加）	17
1件ごと（追加・編集・削除）	17
1件ごと（転出・退学）	17
■ 教職員データ	
新規追加・編集・削除	18
前年度のコピー	18
並び順	18
■ 年度更新	19
■ その他の機能	
管理パスワード変更	25
COREデータベース群 最適化	25
COREデータベース群 状態チェック	26
COREシステム データ 初期化	26

<コラム>

《コラム1》マクロセキュリティについて	5
《コラム2》サーバーの自動バックアップ、リストア	6
《コラム3》自動リンクの仕組みについて	13

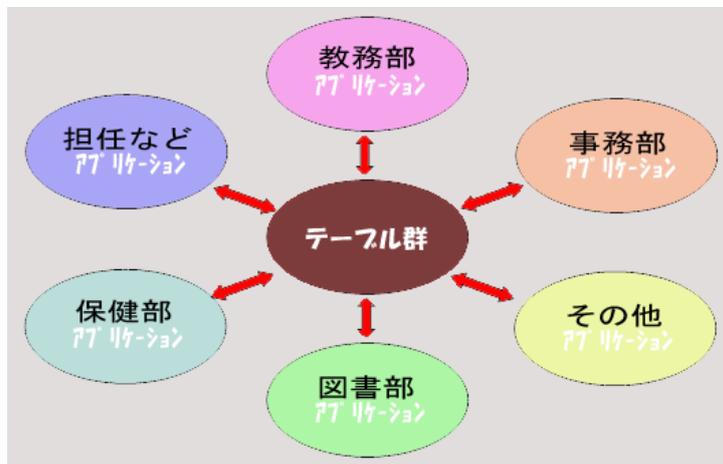
D.Core システムの概要

■ D.Coreの概要～インストール

D.Coreの仕組みと概要

D.Core(※1)は小中高等学校や各種特殊学校での様々な校務処理を効率化するため、主にMicrosoft社のAccessで作成されたソフトウェア群です。生徒名簿管理など校内で重複しがちな作業を軽減したり、各校務処理で集まった情報を校内で効率的に活用できます。

D.Coreソフトウェア群は、大きく2つのファイル群から構成されています。1つはデータを蓄積する『テーブル群』、もうひとつはこれらのデータを操作する『アプリケーション群』です。アプリケーション群には、各分掌からデータを操作するためのインターフェース画面が用意され、職員はこれらを通してテーブル群のデータをやりとりする設計になっています。各インターフェース画面は、複数起動できるように設計されているので、職場のLANを利用した場合、複数職員による同時並行処理が可能です。



【実行に必要な環境】

- 対応OS : Windows98(SE)、WindowsNt4.0、WindowsMe、Windows2000、WindowsXp
必要ソフト : Microsoft Access、Excel、Word (※2)
OfficeUpdateを行わないと、エラーが出る可能性があります。
CPU : 200MHz程度以上の速度(※3)
メモリ : 64MByte以上 (OSの種類によっては更に必要)
HDD : 30MByte程度以上の空きエリア(※4)
その他 : 必要に応じてインターネットやサーバー環境(※5)

注1.Microsoft,Windows,Word,Excel,Accessはマイクロソフト社の登録商標です。

注2.本プログラムを運用した結果の影響については、責任を負いかねます。あらかじめご了承ください。

注3.ここで紹介している全てのD.Coreプログラムの著作権は作者にあります。許諾を得ずに複製及び利用することは禁じます。

※1.『D.Core』は、「データコア」とか「デーコア」とか「コア」と読んでください^^

※2.いづれもバージョン2000以降。Accessのない環境では、アクセスタイトムをインストールすることで利用可能です。

※3.CPU速度が遅いと画面更新や統計計算などに時間がかかり、もたつきます。

※4.インストールするソフトの種類や利用するデータの量に依存しますので多い方がいいです。

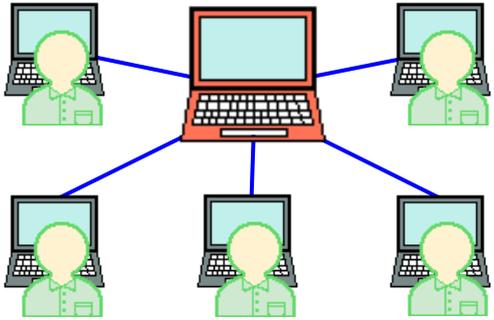
※5.インターネットが接続されている場合、最新のバージョンチェックやダウンロード等ができます。

サーバー環境で利用することで、複数クライアントから同時に各種データ処理が行えます

運用環境の準備

D.Coreは、スタンドアロン環境（PC 1 台の環境）からクライアント・サーバー環境まで、職場の状況に応じた運用が可能です。これから運用を開始する場合は、将来にわたってどのような使い方をしていくのかを想定し、それにあつた環境を選択する必要があります。

環境に応じた設定には、細かな部分で若干違いがありますが、それらは後述することにして、取り合えずは、スタンドアロン環境とクライアント・サーバー環境のどちらが目的にあつた運用なのかを確認してください。例えば、D.Coreを保健室にあるPCにインストールし健康診断統計にしか使わないのであればスタンドアロンの方が適していますし、生徒の出席管理等多くの先生方が頻繁に使用する可能性があるのならクライアント・サーバー環境の方が適していると言えます。

	
スタンドアロン環境	クライアント・サーバー環境
<p>1 台のPCでのみD.Coreシステムを使用する。このPCを一人または複数のユーザーで共有する環境。ネットワーク設備の必要が無く、アプリケーションの動作も速い。</p>	<p>LAN環境を利用し、複数のクライアントPCから同時に処理をする環境。 テーブル群は、共有できるPCに保存する必要がある。フォルダをフルアクセスで共有させるなど、多少ネットワークの知識が必要になる。同時に処理する台数が増えてくると、アプリケーションの動作が遅くなったり、データ破損等の可能性があるので、後述する対策も必要になる。誰かがD.Coreの管理者を担当することが望ましい。</p>

上記2つの環境は、D.Core運用後も双方への移行が比較的簡単にできます。しかし、その際は各PCへの設定や、職員への周知、また後述する保守・管理等の作業にも関係してきますので頻繁に移行しない方が良いでしょう。

また、何れの環境下においても、D.Coreインストール先のフォルダには使用するユーザーがフルアクセス（ファイルへの読み、書き、削除等）できる権限を与える必要があります。

インストール方法

D.Coreは、目的別にインストーラーが用意されています。例えば、成績処理や出席管理を運用するための教務部セット、保健室来室管理や健康診断統計を行うための保健部セットの様です。そして全てのセットと共に必要不可欠なのが、『基本セット』です。基本セットは、主に生徒データの管理や年度更新、D.Coreファイル群の状態を管理したりするD.Coreの中核となるセットです。以降は基本セットのインストール方法を例に説明しますが、これ以外のセットのインストール方法も同じ要領で行えます。

【基本セット ダウンロードとインストールの実行】

インストーラーは、以下のURLからダウンロードページに移動し、基本セットにある「Download」ボタンを押します。「開く」ボタンを押すと、ファイルのダウンロードが始まり、その後インストーラーが起動します。

<http://round.main.jp/core/index.htm>

ユーザー名	
パスワード	

ここで注意することはインストーラー自体もAccessのファイルで作成されていますのでインストールを実行するPCには予めAccessがインストールされている必要があります。(※1)ファイルがダウンロード後実行されると(※2)、インストール場所を聞いてきますので指定してください。(※3)

指定した場所に、既にD.Coreがインストールされている場合はアップデートインストール(※4)、インストールされていない場合は、新規インストールになります。

インストールが正常に終了すると、指定場所に『CORE』フォルダが作成されます。

他のセットをインストールする場合は、繰り返しダウンロードページからインストールを実行し、インストール場所は、基本セットで指定したCOREフォルダを指定してください。

(※1)Accessが手元に無い場合は、以下のURLからAccessランタイム版をインストールすることで、Accessが使用可能になります。(ランタイム版とは、Accessのファイルを簡易実行のみができる無償版)

<http://round.main.jp/core/runtime.htm>

(※2)セキュリティの警告等が表示される場合がありますがプログラムに問題はありませんので、実行を続けるよう選択して進んでください。

(※3)サーバーにインストールする場合は、クライアントでインストーラーを起動し、インストール先をマイネットワーク⇒サーバー⇒目的の場所の様に指定してください。

(※4)アップデートインストールの場合、現在使用中のテーブルデータ等は、初期化されずに保持したままでインストールします。

起動方法

『CORE』フォルダを開くと、『※ランチャー』というAccessのファイルがあるので、実行してください。インストール済みの起動できるD.Coreアプリケーションの一覧が表示されますので、起動したいボタンをクリックしてください。

また、『CORE』フォルダ⇒『Application Databases』フォルダを開くと、各セット別のフォルダが存在します。更にこれらのフォルダ内には、'■'マークの付いたAccessファイルがありますが、これらがランチャーで表示されるアプリケーションですので、これらを直接起動しても大丈夫です。また、これらアプリケーションのショートカットを作成しておくことで、ランチャーを通さず、迅速な起動をすることも出来ます。

※起動時にセキュリティの警告等が表示される場合がありますがセキュリティ的に問題はありませんので、実行を続けるよう選択して進んでください。また、Accessのオプション設定で、セキュリティレベルを下げたり、セキュリティエリアを設定することで、起動時に毎回表示される警告メッセージをスキップすることが出来ます。《p5コラム1参照》

■ 保守・管理

バックアップ

PCの強制終了やネットワークトラブル、更にはハードディスクの故障等、日常的に様々な原因でファイル破損の可能性は充分考えられます。D.Coreにおいても、この様な現象に遭遇した場合、蓄積された膨大なテーブルデータは、最悪の場合復旧不可能な状態になります。

これらの予防法として最も有効なのはバックアップです。

スタンドアロン環境の場合は、定期的に手作業でバックアップするのが適切かと思いますが、クライアント・サーバー環境で、サーバーが24時間稼働している場合は、定時に自動バックアップするなどの方法も考えられます。《コラム2参照》

何れの場合も、「CORE」フォルダ毎バックアップするようにしてください。

また、バージョンアップや年度更新の前にもバックアップを実行した方が安全です。

バージョンアップ

D.Coreの各ファイルは、随時バージョンアップすることがあります。最新のバージョンや、現在自分の環境にインストールしてあるファイルのバージョンは、インターネットが接続されている場合、基本セットに含まれる『管理パネル』で確認できます。また、この画面では現在インストールされているセット内容も明示されます。《詳しくは、p25その他の機能を参照》

新しいバージョンを確認できた場合、インストールと同様にダウンロードサイトからインストーラーを起動してください。インストール場所に、現在使用している『CORE』フォルダを指定するとアップデートインストールとなり、テーブル内に蓄積された既存データは保持されたままアップデートします。

ただし、アップデートインストール中、ユーザーの誰かがD.Coreファイルを使用していると、インストールが中断されますので、アップデートインストールの際は、事前に全てのユーザーが、D.Coreアプリケーションを終了しておいてください。

また、アップデートの前は念のためのバックアップをお勧めします。

❖ ❖ ❖ コラム 1 : マクロセキュリティについて ❖ ❖ ❖

Accessでは、マクロやVBAといったプログラムの要素を追加することで、基本機能だけでは不可能な動作も実行可能になります。しかしながら、これらプログラムの機能には、PC上の全ファイルを意図も簡単に削除することやユーザーが気づかないまま一部を書き換えること等、多くのことが可能なため、マクロやVBAが組み込まれているAccessファイルを開くときには、実行時に警告を発する仕組みに設計されています。

警告時に実行を進めるためには、次のような操作が必要になります。



(Access2003 の場合)
開くボタンを押す



(Access2007 の場合)
オプションボタンを押してコンテンツを有効にする

動作内容の分からないファイルを初めて実行する場合は、この警告が非常に有効なものになりますが、既に安全なアプリケーションであることが分かっている場合は、起動毎に表示される警告は省略したいものです。

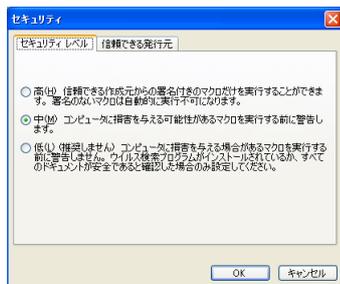
Accessには、これら警告画面を表示するセキュリティレベルを変更したり、安全であるプログラムを登録することで、警告画面を表示しない等のオプションが用意されています。
(※個々のPC毎設定する必要があります。)

□セキュリティレベルを下げて、警告表示を出さなくする方法

(※全てのファイルの警告が表示されなくなるため、十分な注意も必要です。)

《Access2003の場合》

Accessを起動⇒「ツール」メニュー⇒「マクロ」⇒「セキュリティ」



(ランタイム版 Access の場合は、基本セットに含まれる「マクロセキュリティ画面表示.mdb」を起動して表示させてください。)

マクロセキュリティを「低」に設定する
⇒「OK」ボタン

《Access2007の場合》

Accessを起動⇒  を押す。⇒左メニューの中の「セキュリティセンター」を押したのち、右画面の「セキュリティセンターの設定」ボタンを押す。
左メニューの中の「マクロの設定」を押し、右画面で「すべてのマクロを有効にする」を選択する。⇒「OK」ボタン。

□安全であるファイルを登録し、警告表示を出さなくする方法

《Access2007の場合》

Accessを起動⇒  を押す。⇒左メニューの中の「セキュリティセンター」を押したのち、右画面の「セキュリティセンターの設定」ボタンを押す。
左メニューの中の「信頼出来る場所」を押し、警告を出さなくてもよい信頼されたファイル群が保存されているフォルダの場所を追加登録する。

❖ ❖ ❖ コラム2:サーバーの自動バックアップ、リストア ❖ ❖ ❖

クライアント・サーバー環境で運用している学校では、大抵の場合、サーバーにファイルバックアップシステムが導入されています。これらは、ファイルを定期的に別な場所へ保存し、ファイルになんらかの障害が起きた場合、保存していたものを使って復旧させるというものです。

D.Coreシステムのテーブルファイルに関しても障害が起きた場合は、運用に大変な支障を来す為、バックアップシステム下での運用が望まれます。

しかしながら、サーバー代わりに1台のPCをファイル共有している環境や、サーバーを24時間稼働しているにもかかわらず、バックアップシステムを持っていない環境も存在するでしょう。

サーバーOSが稼働している場合のタスク処理を利用して自動コピーを行い簡易バックアップする方法を紹介します。

xcopy D:\CORE*.* E:\backup*.* /E /C /H /R /Y

DOSコマンドXCOPYは、ファイルとフォルダをディレクトリごとコピーするコマンドです。

上記例では、D:ドライブにある「CORE」フォルダ内のファイル全てを、E:ドライブの「backup」フォルダ内に上書きコピーするものです。

テキストファイルに記入し、「backup.bat」のように、拡張子BATでサーバー内に保存します。

サーバーOSのコントロールパネル⇒タスクを起動します。タスクの追加をすることでウィザードが起動しますので、先ほど保存したバッチファイルを指定し、実行する時刻を設定することで、1週間ごとや毎日のように定時にバックアップ(自動コピー)できます。

ファイルに何らかの障害が起きて、リストアする場合は、「backup」にあるファイルを「CORE」フォルダ内の該当ファイルに上書きすることで、修復可能です。

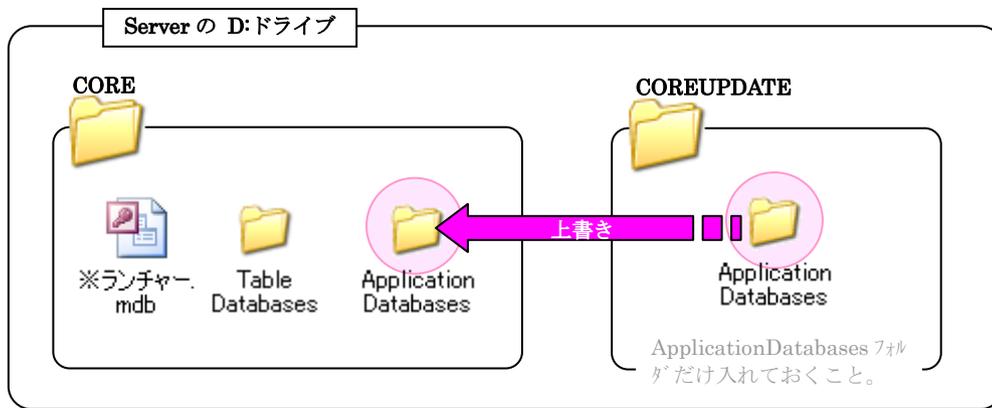
バックアップの別な利用方法として、例えば、年度末ごとに「CORE」フォルダを別な場所へ保存しておくことで、過去のデータにアクセスすることが可能になります。(※詳しくは、p13《コラム3》を参照)

更に安定させる方法

クライアント・サーバー環境で運用している場合、多くのユーザーがネットワークを通して同時にデータを操作するため、実行速度が極端に遅くなったり、アプリケーションが強制終了したりするなど予想外の動作が起きる可能性が増します。そこで、より安定した運用をするため（１）～（５）までの方法を紹介します。

（１）定期的にアプリケーション群をリフレッシュする。

サーバーに保存してあるアプリケーション群を複数のクライアントで利用すると、アプリケーションファイルが不安定になったり、破壊されることがあります。この原因は、クライアントマシンにインストールされているAccessやOSのバージョン混在や、ネットワークの状況、PCの不具合であったりします。ファイルが破壊された場合は運用が出来なくなりますので、例えば、業務の行われない深夜の時間等に、アプリケーション群を毎日上書きし、正常な状態を保つことで、ある程度安定した環境を維持することが可能です。具体的には、正常に動作しているアプリケーション群（COREフォルダ内のApplication Databasesフォルダ）を別な場所にコピーしておき、サーバーのタスク処理を利用して、毎日午前0時に上書きコピーするというものです。



上図の一例では、現行で動作しているCOREフォルダにある、ApplicationDatabasesフォルダを「COREUPDATE」という名前で作成した別なフォルダにコピーしておき、サーバーのタスク処理で毎日定時に現行のCOREフォルダ内に上書きするものです。

「タスク」とはWindowsサーバーOSに標準で備わっている自動実行スケジューラーで、OSのコントロールパネル⇒タスクで起動します。タスクの追加をすることでウィザードが起動し、どのバッチファイルをどの時刻に自動起動するかを設定することができます。

以下例のような、フォルダ毎コピーするDOSコマンドを記述したテキストファイルを作成し、ファイル名「coreupdate.bat」のように、バッチファイルとしてサーバー内に保存しておき、タスクウィザード内で指定します。

```
Xcopy D:¥COREUPDATE¥*.* D:¥CORE¥*.* /E /C /H /R /Y
```

↑
別 CORE フォルダ のディレクトリ

↑
現行 CORE フォルダ のディレクトリ

※バッチファイルとは、DOSコマンド等をテキストで列挙したファイル。テキストファイルを拡張子.batで保存することで、バッチファイルとして認識される。

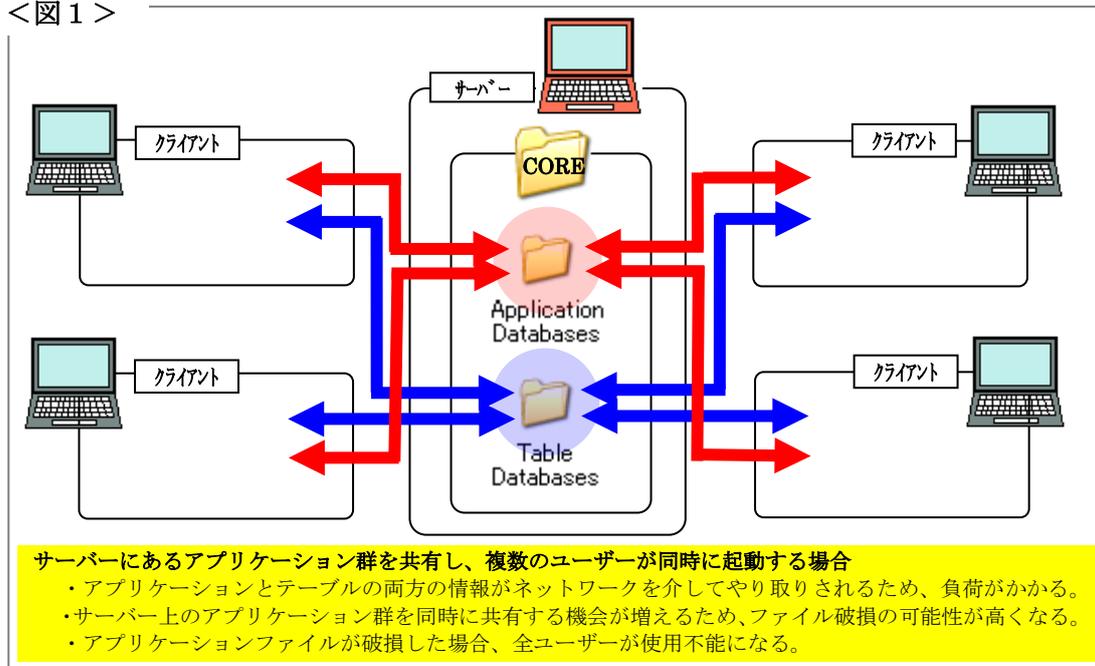
※「Application Databases」フォルダだけ、コピーするようにしてください。誤って「Table Databases」フォルダもコピーしてしまうと、バッチが実行されるたびに、現行データに上書きされて、元に戻ってしまいます。

(2) クライアントにコピーしたアプリケーション群を使用する。

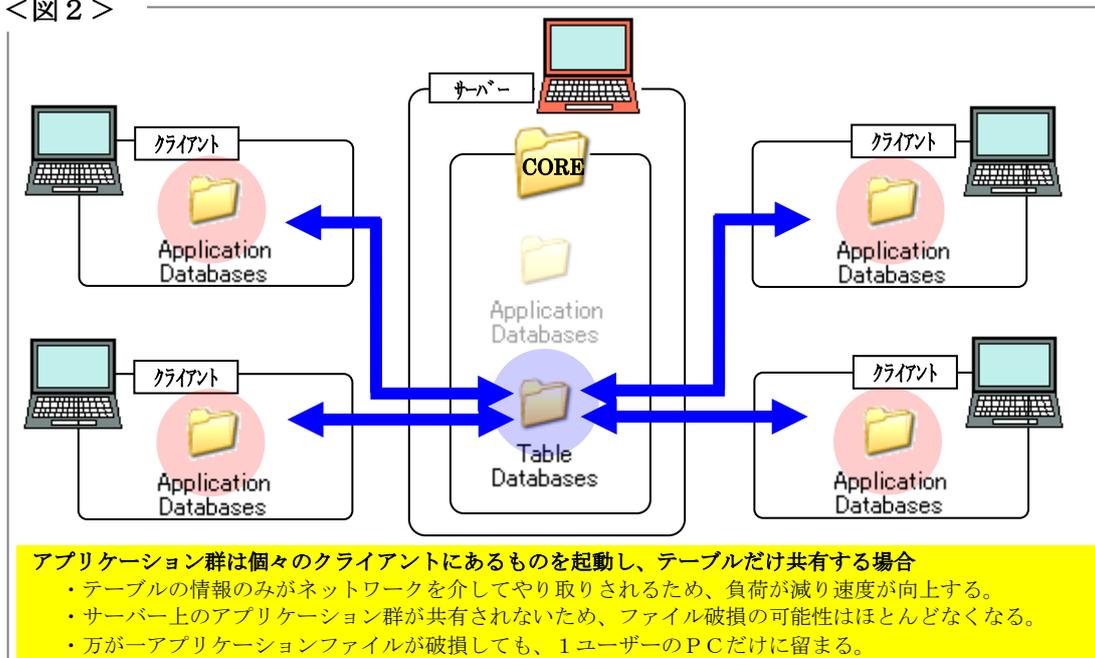
サーバーにある「CORE」フォルダ内のアプリケーション群をクライアント機から直接起動し、複数のユーザーが実行することは、非常にシンプルな共有方法ですが、前記理由等によりファイル破壊のリスクも持っています。〈図 1〉

そこで、アプリケーション群は、各クライアントPCにそれぞれ保存したものを使用し、サーバー上では、テーブルデータのみ共有するといった方法を取れば、不具合を減少させるだけでなく、速度アップにもつながります。〈図 2〉

<図 1>



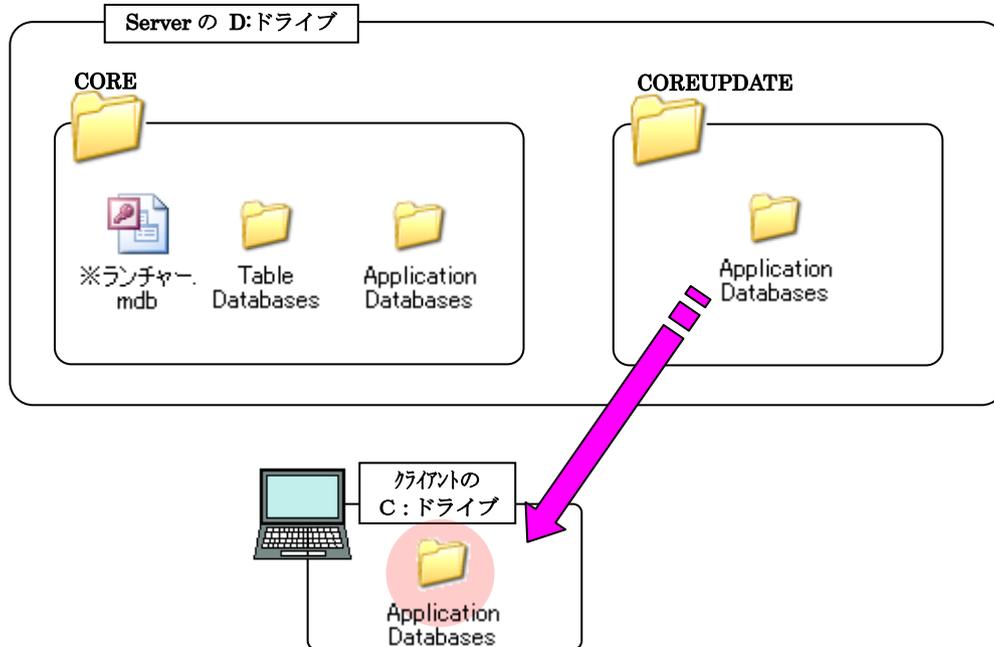
<図 2>



サーバーに保存されている「ApplicationDatabases」フォルダを各クライアントPCにコピーするだけで実現できます。

アプリケーション群を各クライアントに保存したものを使用する形態では、ひとつ留意点があります。それは、D.Coreがアップデートされた場合、各クライアントに保存されているアプリケーション群もアップデートする必要があることです。

もちろん、1台ずつ手作業でアップデートしてもよろしいのですが、以下に、各クライアントPCの起動時ごとに自動コピーさせる一例を紹介します。



上記一例構成で、クライアントマシンの起動時に、サーバーの「COREUPDATE」フォルダ内にある「ApplicationDatavases」フォルダをコピー上書きするようなバッチファイルが下の例です。

```
Xcopy ¥¥Server¥COREUPDATE¥ApplicationDatabases¥*.¥  
C:¥ApplicationDatabases¥*.¥ /E /C /H /R /Y
```

上記のような、フォルダ毎コピーするDOSコマンドを記述したテキストファイルを作成し、ファイル名「coreupdate.bat」のように、バッチファイルとしてクライアントPC内のスタートアップフォルダに保存しておくことで、起動時に毎回自動実行されます。

D.Coreの管理者は、サーバーの「COREUODATE」フォルダ内のアプリケーション群を最新のバージョンアップするだけで、全クライアントPC内のアプリケーションも最新の状態に保つことができます。

※通常、スタートアップフォルダは、「C:¥Documents and Settings¥All Users¥スタートメニュー¥プログラム¥スタートアップ」に存在します。

(3) OS及びOfficeのアップデートをこまめに行う。

各クライアントPCのOSやOfficeは、常にアップデートされますので、Microsoft社の「Microsoft UPDATE」のページからアップデート状況をチェックし、最新の状態を保つように心がけてください。作者の環境を例にすると、約30台前後のユーザー環境で使用し、毎日のようにファイル破損していた状況が、Officeアップデートを全クライアントPCに施した結果、以後、まったく無くなりました。

(4) アプリケーションを開きっぱなしにしない。

各クライアントPCでD.Coreアプリケーション実行中は、サーバーのテーブルデータファイルが開いた状態で共有されています。同時に実行するユーザー数が増えるほど、ネットワーク上を行き来するデータ量が増えるとともに、各ユーザーの処理時間が遅くなる傾向がありますので、処理が終了したら、すみやかにアプリケーションを終了させる等、長時間実行しっぱなしの無い様にする事で、D.Core全体のパフォーマンスが向上します。

(5) 最適化・修復を試みる

アプリケーションや、テーブルデータファイルが破損したと思われる場合、次の手順で修復される場合が極まれにあります。

- 1) 破損ファイルが共有しているファイルの場合は、共有中の全ユーザーにD.Coreアプリケーションを終了させる。
- 2) 破損したと思われるファイルを「Shift」キーを押したまま起動する。
- 3) Accessの「ツール」メニュー⇒「データベースユーティリティ」⇒「データベースの最適化／修復」を実行する。（※ランタイム版Accessの環境では実行できません。）

※しかしながら、修復される可能性はそれほど高くないので、きちんとバックアップする措置をとった方が、確実に復旧させることができます。

■ 管理者作業のまとめ

管理者とは、D.Coreシステムを運用する上で特別な操作を行う人を指しています。

D.Coreシステムを正常に運用するために、年度更新やアップデートなど特別な操作を行います。

管理者の作業は、誤操作するとD.Coreシステム全体が使えなくなる恐れもあるため、通常はPCに詳しい方が行うと良いでしょう。また、システム運用上重要な操作・管理を行うため、一般のユーザーが操作できないように、パスワード要求や特別なアプリケーションを通す仕組みに設計されています。

こういった管理者の作業は日々頻繁にあるわけではなく、主な作業は「導入時の環境設定」と「年度末の年度更新」の2つです。

<導入時の作業>

- ・インストール (D.Core新規インストール、学校情報・教職員情報・生徒情報登録)
- ・サーバー環境設定 (共有フォルダの設定、バックアップシステムの設定)
- ・クライアント環境設定 (OS・Officeのアップデート、各種安定運用設定等)

<運用中の作業>

- ・インストール (アップデートインストール)
- ・生徒在籍移動処理 (転編入、退学など)
- ・年度更新処理

❖ ❖ ❖ コラム 3: 自動リンクの仕組みについて ❖ ❖ ❖

D.Coreの全てのアプリケーション群はその起動時に、テーブル（実際にデータが保存されるファイル）と自動リンクするように設計されています。

この自動リンクは、次の1～4の優先順位で行われています。

- 1、起動するアプリケーションと同じフォルダ内に、必要なテーブルファイルが全て存在する場合、同フォルダ内のテーブルに再リンク。

「※利用情報.mdb」も同フォルダ内に必要

- 2、正常な「CORE」ディレクトリ構造内のアプリケーションを起動した場合、「CORE」フォルダ内にある「Table Databases」群に再リンク

- 3、利用情報に記録されたアドレス（前回の正常起動時にリンクされたアドレス）の「Table Databases」群に再リンク

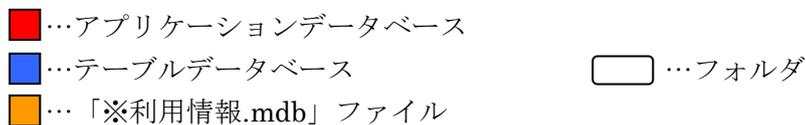
- 4、上記どの場合でも、テーブルとのリンクが不可能な場合、テーブルの場所を指定させるダイアログボックスを表示し、ユーザーに指定させる。

上記規則で自動リンクが行われるため、例えば、サーバー上で運用している「CORE」フォルダを自分のPC上にコピーし、このアプリケーションを起動した場合、リンク先がサーバー上ではなく、自分のPC上のテーブル群に自動修正されます。これにより、コピーしてきた「CORE」群は、いままで運用していたサーバー上のテーブルとはリンクが切り離され独立して動作するため、データ削除や動作確認等のテストランが可能になります。

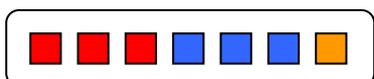
また、年度更新前の状態の「CORE」フォルダごとコピーして保管しておくことで、過去年度データの状態のまま動作させることが可能になります。

《 起動可能ディレクトリ構成例 》

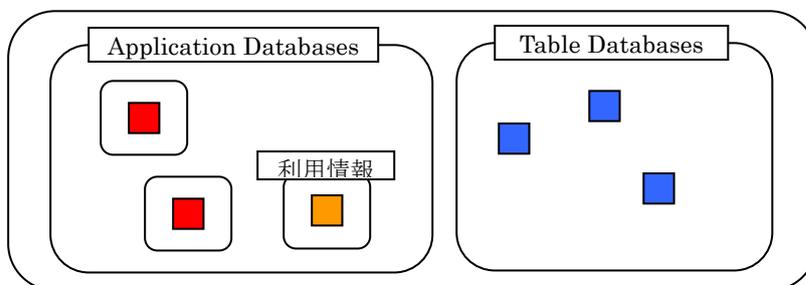
起動可能なディレクトリ構造は、組み合わせがいくつかありますが、以下に例を挙げます。



<パターンA>



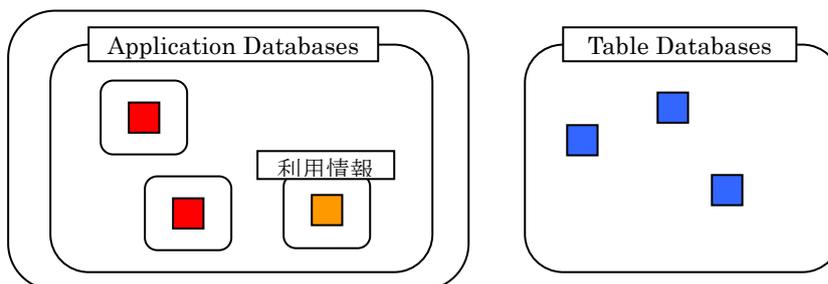
<パターンB>



<パターンC>



<パターンD>



<起動原則 1 > 「※利用情報.mdb」が、使用するアプリケーションと同フォルダ内か、ひとつ上の階層の「利用情報」フォルダ内に存在すること。

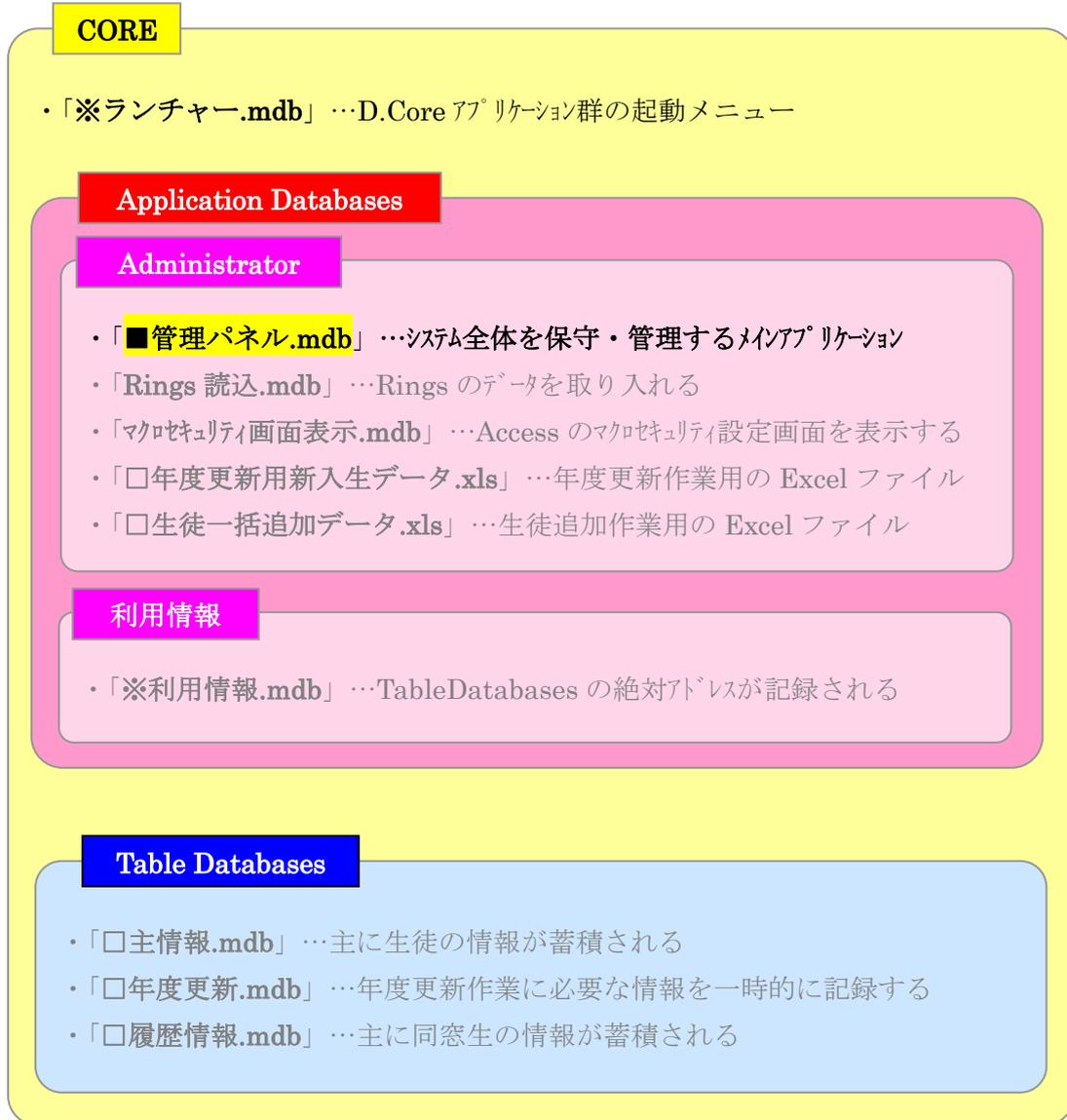
<起動原則 2 > テーブルファイルはひとつのフォルダ内に全て存在すること。

<起動原則 3 > 利用情報には、テーブルが存在しているフォルダのフルパスが書かれる。

基本セット

■ 基本セットの内容

基本セットをインストールすると、以下のディレクトリ構成下に、各ファイルが作成されます。



基本セットの主なアプリケーションは、『**管理パネル**』で、ここから、生徒、教職員、学校等の各情報をコントロールします。また、D.Core システム内の各ファイルインストール状態をチェックする等の機能も含まれています。一般的な運用方法として、管理パネルは、D.Core システムの**管理者**のみが使用する設計になっていますので、クライアント・サーバー環境では、管理パネルにパスワードを設定するか、管理パネル自体を一般ユーザーには公開しない方が良いでしょう。

※基本セットが「CORE」フォルダ内に無いと、他のセットは動作しませんので、必ずインストールするようにしてください。

※管理パネルのパスワード設定方法は、p25 その他の機能を参照してください。

管理パネルを起動すると、下図のような管理パネルメニューが表示されます。
(※管理パネルにパスワードが設定されている場合は、メニュー表示の前にパスワード入力画面が表示されます。)

■ 学校情報

学校情報設定

メインメニューから「学校情報操作」ボタンを押すと以下のような画面が表示されます。

それぞれの項目を入力後、「OK」ボタンを押すと、各印刷物等に設定情報が反映されます。

「キャンセル」ボタンは、入力をキャンセルしてメニュー画面へ戻ります。

注意する部分は、「年度」です。年度は西暦4桁で設定し、**新年度の運用開始時には設定を確認する必要があります**。(※年度更新によって自動的に新年度設定を更新しますが一応確認が必要です。)

■ 生徒データ

基本的に、生徒データの編集は『生徒情報管理』という各担任が使用するために用意された別セットのアプリケーションから自由に操作できるように設計されています。ただし、誤操作防止のため、新規追加と削除に関しては管理パネル以外からは出来ない設計になっています。通常、これらの操作は管理者が行うこととなります。



メニューから「生徒情報操作」ボタンを押すと表示される画面

新規追加 (Excelから一括追加)

この追加方法は、Administratorフォルダ内にある『**□生徒一括追加データ.xls**』に、予め追加に必要な生徒データを書き込んでおき、一括で新規追加するものです。**初めてD.Coreを運用する場合は、この方法を用いて生徒データを登録します。**

「□生徒一括追加データ.xls」を直接開き、必要事項を記入して保存します。(他のファイルからデータを貼り付ける場合は、形式を選択して貼り付け (値) をお勧めします。)

エクセルに記入する生徒データは、名簿順の必要はありません。エクセルからアクセスに取り込まれる際ソートされます。

また、全ての項目を記入する必要はありません。例えば住所等は、新規登録後でも編集が可能です。最小限の項目を入力するだけでも構いません。

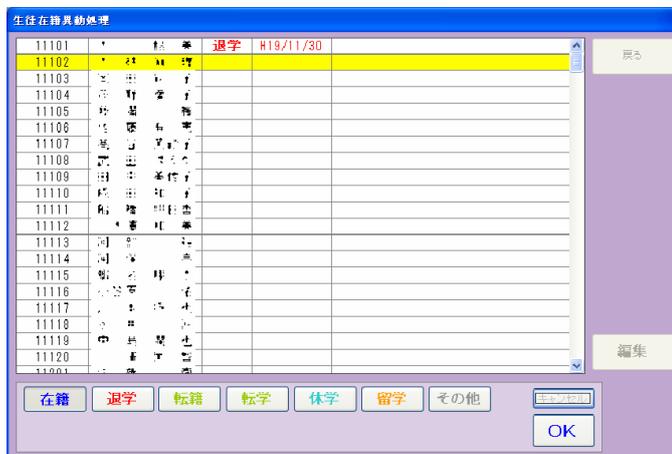
取り込み時に、データ記入ミスや必入力項目の未入力があれば、取り込みを中止し、エラーの箇所を表示します。

1件ごと (追加・編集・削除)

- ・ 1件ごとの追加は、**年度途中で転編入生があった場合等に行います。**
- ・ 削除は、完全に間違った生徒データである場合だけ使用します。例えば、転校や退学のときは、次の「転出・退学」から行ってください。

1件ごと (転出・退学)

生徒の「退学」・「転籍」・「転学」・「休学」・「留学」等の処理を行います。



在校生一覧から、処理したい生徒を選択して、「編集」ボタンを押します。

下部に表示されるボタン群から該当する処理を選んでください。場合によっては、日付も入力する必要があります。

最後に「OK」ボタンを押します。

■ 教職員データ

メニューから、「職員情報操作」ボタンを押すと、以下の画面が表示されます。

表示されている教職員リストは、画面左上に表示される「年度」のデータのもので、

必要であれば、年度を切り替えてください。

以下の操作は現在表示されている年度のデータに対して行われますので必ず年度を確認してください。

新規追加・編集・削除

新規追加・・・設定年度に1人ずつ新規教職員データを追加します。下部に表示される項目に必要な事項を入力し、「OK」ボタンを押してください。

編集・・・リスト内で選択されている教職員データを編集します。

削除・・・リスト内で選択されている教職員データを削除します。削除した場合、連動している他のデータも削除されますので、注意が必要です。

役職・・・「校長」、「教頭」、「教諭」、「臨時講師」、「非常勤講師」等を入力します。

氏名・・・氏名を入力します。

担当教科・・・「国語」、「理科」等を入力します。

略名・・・氏名を印刷するときの略名を長さ1～3文字程度で入力します。一般的には苗字ですが、同苗字がある場合、苗字+氏名1文字のように入力すれば良いでしょう。

ふりがな・・・ふりがなを入力します。

性別・・・「男」または「女」の何れかを選択します。

担任・・・担任の場合は、学年、クラスも入力します。

パスワード・・・成績管理を起動するときのパスワードを入力します。(規定値は小文字の「p」)

管理者権限・・・成績処理の管理者画面を操作できる権限を与えます。

前年度のコピー

設定したい年度に、まだ登録されている教職員データが1件も無く、前年度のデータがある場合に使用できます。(つまりD.Core運用開始2年度目以降に使えます。)

前年度登録してあるデータをもとに作成できますので、新年度の度に、新規で1件ずつ登録していくよりも、短時間で登録完了できます。運用2年度目以降は、この方法をお勧めします。コピー実行で、前年度とまったく同じデータを新年度にコピーしてきますので、転勤等で教職員の一部入れ替わった分を、1件ずつ追加・削除します。

並び順

選択している教職員の並び順を変更します。並び順は実際の処理に特別な影響を及ぼすことはありませんが、他アプリケーションでの教職員表示や職員名簿を印刷するときの順番に反映されます。一般的には、学校で使われている教員名簿の順番などにあわせると良いでしょう。

■ 年度更新

年度更新とは、新年度用に生徒のデータを変更する作業です。具体的には、卒業生や除籍者データの削除、新入生データの追加、在校生のクラス移動及び新学籍設定等をまとめて行います。

『管理パネル』を起動後、『年度更新パネル』ボタンで下記画面が表示されます。

【管理パネル】 メインメニュー > 年度更新パネル

① 新年度設定 2008 MENUへ戻る

② 卒業生チェック ③ 除籍者チェック

④ 在校生新クラス入力 ⑤ 入学生チェック

⑥ 新学籍作成

⑦ データレビュー << 年度更新実行 >>

年度更新の注意事項

- 『年度更新実行』ボタンを押すまでは、実際のデータは更新されません。
- 『年度更新実行』後は、データを元に戻す事はできません。自動的に削除されるデータ等もあるため、更新実行前に、COREフォルダ毎バックアップ(別な場所にコピー)することを強くお勧めします。
- 生徒で氏名変更のある場合は、新学籍の並び順に影響があるため、事前に、氏名変更の処理を完了している必要があります。
- 年度更新を実行すると、成績、図書、保健などD.Core群のデータが全て新年度用に更新されます。
- 更新実行時は、このプログラム以外のD.Coreプログラムが実行中でないことを確認してください。

年度更新は、原則①～⑥の操作を順番に行った上、⑦で新年度データの仮結果を確認し、最終的に《年度更新実行》ボタンで実際にデータ変更を行うといった流れになります。

《年度更新実行》を行うまでは、実データの更新は行われませんので、①～⑦までの操作を何度行っても構いません。但し、《年度更新実行》後は、変更されたデータを元に戻すことは出来ませんので、最終実行直前に『CORE』フォルダごとバックアップすることを強く勧めます。

※重複年度更新等の誤操作を防ぐため、年度更新実行を行った後は、《年度更新実行》ボタンが約半年間使用不可能(ボタンを押せない状態)になりますが、こういった仕様ですのでご了承ください。

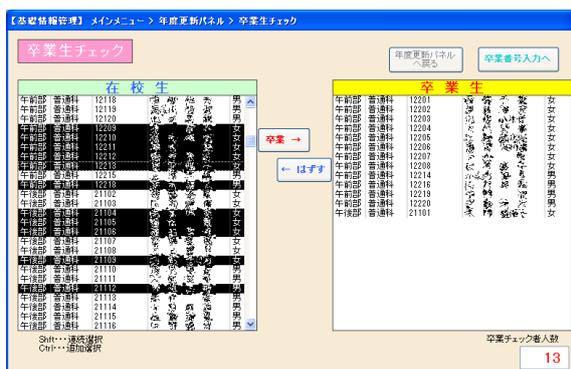
① 新年度設定

クリックすると、ボタン右の入力欄が編集可能状態になりますので、新しく設定する新年度を西暦4ケタで入力します。

② 卒業生チェック

画面左側に在校生一覧が表示されますので、卒業予定の生徒を選択し「卒業」ボタンを押します。

右側には、登録済みの卒業生一覧が表示されます。卒業生から外したい場合は、こちら側で選択し「はずす」ボタンを押します。



どちらの一覧も Shift キーや Ctrl キーを押しながらクリックすることで、連続、追加選択ができます。

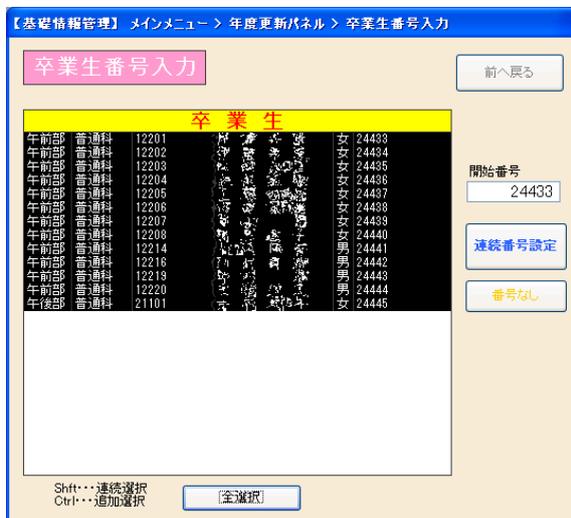
操作は一回で行う必要はありません。何度か操作を行い、卒業生を正しく選択してください。

「卒業番号入力へ」ボタンを押すと、卒業生番号の入力画面へ移ります。

この番号は、年度更新実行時に、卒業生を同窓生データとして処理する際に記録する番号ですので、同窓生データを特に使用しない場合は、入力しなくても結構です。（一般的には、卒業証書番号や同窓生通し番号等を入力すると良いでしょう。）

入力する場合は、設定したい卒業生を選択し（通常は全員選択）、開始番号を入力後、「連続番号設定」ボタンを押してください。

卒業生番号は、実際の年度更新を行うまで何度でも再設定することができます。



③ 除籍者チェック

除籍者は、退学等の理由で、新年度には在籍していない生徒のことです。(留学や休学は除籍者に含まれません)

この画面では、現在設定されている除籍者の名簿と合計人数を確認するだけです。実際に除籍登録をしたりする場合は、「メインメニュー」⇒「生徒情報操作」⇒「転出・転学」で行ってください。

【基礎情報管理】 メインメニュー > 年度更新パネル > 除籍者チェック

除籍者チェック

年度更新パネル
戻る

除籍者						
午前部	普通科	11101	大野 真	女	退学	2007/11/30
午前部	普通科	12217	大野 真	女	退学	2007/11/12
午後部	普通科	21208	大野 真	男	転学	2007/08/28
午後部	普通科	21219	大野 真	男	退学	2007/08/06
午後部	普通科	22111	大野 真	男	退学	2007/08/31
午後部	普通科	22112	大野 真	男	退学	2007/08/19
午後部	普通科	22113	大野 真	男	退学	2007/10/31
午後部	普通科	22206	大野 真	男	退学	2007/07/31
午後部	普通科	22208	大野 真	男	転籍	2007/05/22
午後部	普通科	22211	大野 真	男	退学	2007/08/24
午後部	普通科	22302	大野 真	女	退学	2007/08/19
午後部	普通科	22303	大野 真	女	退学	2007/11/30
午後部	普通科	22315	大野 真	男	その他	2007/07/14
午後部	普通科	23119	大野 真	男	退学	2007/07/31
午後部	普通科	23315	大野 真	男	退学	2007/11/29
午後部	普通科	23320	大野 真	男	退学	2007/08/18
夜間部	普通科	32115	大野 真	男	退学	2007/10/25
夜間部	普通科	32123	大野 真	男	退学	2007/07/06
夜間部	普通科	33214	大野 真	男	退学	2007/12/19

除籍者人数
19

④ 在校生新クラス入力

新年度在校予定生徒一覧(卒業生と除籍者を除いた在校生徒)が表示されますので、各生徒の新学年と新クラスを入力してください。

※高等学校における、部、学科、課程等は、ここでは変更できません。

【基礎情報管理】 メインメニュー > 年度更新パネル > 在校生新クラス...

在校生新クラス入力

年度更新パネル
戻る

旧学籍	氏名	新学年	新組
11102	大野 真	1	
11103	大野 真		
11104	大野 真		
11105	大野 真		
11106	大野 真		
11107	大野 真		
11108	大野 真		
11109	大野 真		
11110	大野 真		
11111	大野 真		
11112	大野 真		
11113	大野 真		
11114	大野 真		
11115	大野 真		
11116	大野 真		
11117	大野 真		
11118	大野 真		
11119	大野 真		

⑤ 入学生チェック

入学生を登録するには、予め『□年度更新用新入生データ.xls』というエクセルファイルに新入生データを入力し、保存しておく必要があります。

「Excel データを開く」ボタンを押すと、エクセルファイルが開きますので、新入生のデータを入力し、保存してください。（※生徒データを他のファイルから Excel へ貼り付ける場合は、「形式を選択して貼り付け（値）」をお勧めします。）

その後、再読み込みさせるボタンを押すと、先ほどのエクセルファイルに登録してある新入生データが表示されます。表示されたデータに間違い等がないか確認してください。間違い等がある場合は、再度 Excel ファイルで編集保存し、再読み込みしてください。

No.	学年	組	氏名	生年月日	性別	課程名	学科名	部名	入学年月日
1	1	2	栗木 一平	2007/04/01	男	定時制	普通科	午後部	2007/04/01
2	1	1	栗木 一平	2007/04/01	男	定時制	普通科	午後部	2007/04/01
3	1	1	栗木 一平	2007/04/01	男	定時制	普通科	午後部	2007/04/01
4	1	1	栗木 一平	2007/04/01	男	定時制	普通科	午後部	2007/04/01
5	1	1	栗木 一平	2007/04/01	男	定時制	普通科	午後部	2007/04/01
6	1	1	栗木 一平	2007/04/01	男	定時制	普通科	午後部	2007/04/01
7	1	2	栗木 一平	2007/04/01	男	定時制	普通科	午後部	2007/04/01
8	1	2	栗木 一平	2007/04/01	男	定時制	普通科	午後部	2007/04/01
9	1	1	栗木 一平	2007/04/01	男	定時制	普通科	午後部	2007/04/01
10	1	1	栗木 一平	2007/04/01	男	定時制	普通科	午後部	2007/04/01
				男子	55	女子	58	計	113

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M
1	課程	学科	部名	学年	組	氏名	性別	ふりがな	生年月日	血液型	入学年月日	入学区分	出身校
2													
3													
4													

【Excel ファイルの各項目内容】

課程・学科・部名 高校の場合に必要な時には入力してください。未入力でも構いません。

学年・組 学年・組を入力してください。どちらも必ず入力する必要があります。

氏名 姓と名の間には、空白を入れてください。

性別 「男」か「女」を入力してください。

ふりがな 姓と名の間には、空白を入れてください。未入力だと並べ替えに影響します。

生年月日 「2002/3/4」または、「h8.1.2」の様に、日付の形式で入力してください。

血液型 A、B、AB、O の何れかを入力してください。未入力でも構いません。

入学年月日 日付の形式で入力してください。必ず入力する必要があります。

入学区分 「入学」、「転入」、「編入」等の文字を入力してください。未入力は入学になります。

出身校 全在籍校を入力してください。未入力でも構いません。

⑥ 新学籍作成

新年度用の学籍を設定する画面です。

1、新学籍の並び順に関する設定をします。(下図青色部分)

2、新学籍の構成に関する設定をします。(下図赤色部分)

学籍を構成する各項目で必要な桁数を設定してください。桁数が0の場合、その項目は使用しません。入替の「△」を押すと、使用する項目の順番が入れ替わります。変換を「使用」にすると、「情報科」⇒「J」のような特定文字変換を学籍に取り入れることができます。

3、新学籍を設定する生徒を選択してください。(下図緑色部分)

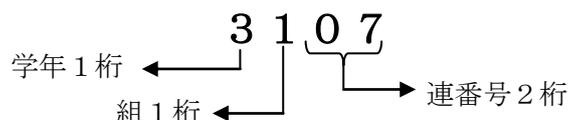
4、「新学籍自動入力」ボタンを押すと、新学籍が自動入力されます。

入替	名称	桁数	変換
	部	1	使用
△	学年	1	--
△	組	1	--
△	連番号	2	--
	学科	0	
	課程	0	
	入学年度	0	
	固定値	0	

※新学籍作成は、年度更新実行をするまで、何度でも編集し直すことができます。

《良く使われている4桁の学籍を作成する場合の例》

- 1、並び順をよみがな、男⇒女に設定
- 2、学年1桁、組1桁、連番号2桁に設定
- 3、全員対象にして新学籍自動入力ボタン



⑦ データプレビュー

①～⑥の登録結果が反映された新年度用の名簿一覧が、新学籍順で新クラス毎、印刷できます。

年度更新実行前の最終段階になりますので、間違い等がないか良く確認してください。

《年度更新実行》

このボタンを押すことで、年度更新が開始されます。年度更新は元に戻せないデータ処理を行いますので、⑦のデータプレビューを使い十分にデータ確認の上、実施してください。念の為、実行前にバックアップをお勧めします。また、年度更新実行時は、他の D.Core アプリケーションが実行されていないようにして下さい。

「年度更新実行」ボタンを押すと、誤操作防止用のコード入力画面が表示されますので、指示にしたがって入力してください。コード入力後、年度更新処理が実行されます。

年度更新実行後は、《年度更新実行》ボタンが約半年間使用不可能（ボタンを押せない状態）になります。

※万が一、実行後にデータを元に戻す必要がある場合でも、バックアップデータが無ければ元に戻すことが出来ません。バックアップを行っており、元に戻したい場合は、バックアップファイルを、そのまま現在運用しているファイルに上書きすることで、元に戻すことが可能です。（バックアップの「CORE」フォルダごと、現在使用している「CORE」フォルダに上書きする。）

■ その他の機能

メニューから、「特殊操作」ボタンを押すと、以下の画面が表示されます。



管理パスワード変更

管理パネル利用のためのパスワードを変更します。D.Coreを使い始めた時点では、パスワードが設定されていませんが、設定することで、管理者だけが起動できるようになります。逆に起動時にパスワード入力を求めさせないようにするには、パスワードを空で設定しなおします。

COREデータベース群 最適化

一般にAccessは、データの更新時に常にファイル内部の新しいエリアに作業スペースを追加していく為、長期間使用しているとファイルサイズが膨大に膨らんでいきます。

最適化とは、ファイル内の不必要な作業スペースを削除し、記憶されている各種データを再構成しなおす操作で、これを行うことでファイルサイズが小さくなると共に、データへのアクセス速度を向上させることができます。通常、数ヶ月～1年程度に1度実行するのが良いでしょう。

【管理パネル】 メインメニュー > 特殊操作 > Coreデータベース群 最適化

Coreデータベース群 最適化

最適化	分類	ファイル名	前回最適化日付	前回最適化ファイルサイズ	現在ファイルサイズ	状態	最適化後ファイルサイズ
<input checked="" type="checkbox"/>	管理	□主情報	2007/12/14 10:40	42,982,944 byte	43,290,624 byte	最適化可能	
<input type="checkbox"/>	管理	□履歴情報	2007/12/14 10:40	450,560 byte	450,560 byte	Good !!	
<input type="checkbox"/>	管理	□年度更新	2007/07/18 13:23	393,216 byte	393,216 byte	Good !!	
<input checked="" type="checkbox"/>	教務	□生徒科目選択	2007/12/14 10:40	921,600 byte	991,232 byte	最適化可能	
<input checked="" type="checkbox"/>	教務	□生徒出欠	2007/12/14 10:40	10,579,968 byte	15,769,600 byte	最適化可能	
<input checked="" type="checkbox"/>	教務	□成績	2007/12/14 10:40	1,298,432 byte	4,308,992 byte	最適化可能	
<input checked="" type="checkbox"/>	教務	□各種検定	2007/12/14 10:40	192,512 byte	196,608 byte	最適化可能	
<input checked="" type="checkbox"/>	保健	□保健情報	2007/12/14 10:40	823,296 byte	926,696 byte	最適化可能	
<input type="checkbox"/>	保健	□健診情報	2007/12/14 10:40	233,472 byte	233,472 byte	Good !!	

現在インストールされているテーブル一覧と最適化可能な状況を表示します。

最適化したいテーブルをチェックし、「最適化開始」ボタンを押すことで、最適化を試みます。目的のテーブルが使用中の場合は、最適化は行われませんので、使用していない時に再度実行してください。

COREデータベース群 状態チェック

各セットのインストール状況とインストールされている各ファイルのバージョン、ネットからインストールできる最新のバージョンが一覧で表示されます。「アプリケーション」と「データ」のボタンで、それぞれの状況を表示することができます。

セット名	アプリケーション名	アプリケーションのバージョン	状態
管理	管理パネル	1.052	最新の状態です
教務	科目登録	1.37	最新の状態です
教務	出欠管理	1.074	最新の状態です
教務	成績処理	1.14	最新の状態です
			最新バージョンではありません
			インストールされていません
生徒指導	部活動管理	1.11	最新の状態です
生徒指導	生徒情報管理	1.02	最新の状態です
			最新バージョンではありません
保健	保健室利用	1.043	最新の状態です
保健	健康診断	β 0.9	最新バージョン[1.0]ではありません
			最新バージョンではありません
図書	蔵書検索		インストールされていません
進路指導	進路指導処理		インストールされていません
课外	同窓生管理		インストールされていません
その他	汎用会計処理		インストールされていません
その他	担任庶務		インストールされていません

COREシステム データ 初期化

D.Coreシステムに記録されている中核データを削除し、初期の状態へ戻します。運用中に誤って実行した場合、データを元に戻すことは出来ないので注意が必要です。初期化の際は、誤操作防止用のコードが表示されますので、指示どおり入力することで、データが初期化されます。

※この操作を行っても一部他のセットのデータは残りますが、中核データが削除されることによって実質他のセットも初期起動的な状態になります。内部のデータを完全に初期インストール時と同じようにしたい場合は、「CORE」フォルダごと削除し、新規インストールを実行してください。

《作者あとがき》

校務処理がワープロ中心で進んでいた時代、私が初めて出会ったデータベースは保健室の来室統計でした。職場の先輩（手塚先生）が当時の MS-DOS 版「桐」を駆使して自作したものらしく、パソコンでの最新処理は表計算と思い込んでいた私にとって、それは斬新そのものでした。データベース云々というよりも、画面を設計できるという機能には心が大きく動きました。ソフトを起動した時のメニュー画面、来室状況の一覧画面などなど。この画面設計機能に現行ソフトの不満を解決する大きな期待を持ってたからです。

当時いた保健室の先生は、定年間じかな方であり、出来ればパソコンは遠慮したいと思っていたかもしれません。しかしながら温厚で熱心な先生は、先輩の作成した統計ソフトを一生懸命に操作していたようです。『今までは1年分の保健日誌を手で数えて統計していたのに、ボタン1つで出来るなんて凄い！』そう感激も見せていました。

本来パソコンを使うことは難しいことです。マウスを動かすことから始まり、キーボードからの日本語入力を覚え、やっとソフトを使い始めると、そこにはずらり並んだメニュー等々。。果たして誰でも使える代物なのかと疑問は常に湧いてきたものです。おそらく保健の先生の目にもそう映ったのかもしれませんが。

そんな中で、先輩の画面設計は、「なるべくキーボードを使わずマウス主体で操作できる。」「入力ミスを減らすため、操作画面をシンプルかつ明瞭にする。」「短時間で入力できるよう工夫する。」「目に優しい色使いにする」等々、使用者の立場になって作り、意見を聞いて更に改良を重ねるといった努力がちりばめられていました。今になって考えてみれば、こうした心遣いこそが当時その先生がデータベースを使いこなせた大きな要因であったと思えるのです。

さて、現在の D.Core は前バージョンの Rings を改良し、市販のソフトにまだまだ足りない「分かりやすさ・使い易さ」という認知科学性を第一のモットーに、先輩の思いや、現場の声を取り入れながら作成してきたものです。SQL-Server への対応や、操作性、安定性などまだまだ課題は多いのですが、現在開発にあたっている手塚先生、佐藤先生と共に、今後も多くの意見を取り入れながら改良を続けていきたいと考えています。

最後になりましたが、作成にあたって多くの意見を頂いた畑山先生をはじめとした青森県養護教諭の皆様方、現場でテストランに協力頂いた県立学校の皆様方に感謝するとともに紙面をお借りしてお礼申し上げます。

2008 / 3 / 1 山本

